# バラのお茶会

藍とY気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バラのお茶会

【Ｎコード】
Ｎ２７２８Ｆ

【作者名】
藍とＹ気

【あらすじ】
凪はどうなる！？変態は何をする！？今後はどうなる！？

## 始まりの前

俺は、昔からかんが良かった。
このときも、いやな予感がして、父を呼び止めた。
『おとうさん、どこにいくの？』
『お父さんはな、今からお茶会に行くんだよ』
まだ、小さかった俺は、お茶会の意味が分からず、首をかしげて父を見上げた。
父は、そんな俺を悲しそうな目をして見つめてから、笑って、
『じゃーな』
とだけ言って家を出て行った。

それから十年、父は帰っていない

# 白

「なぎ～朝よ～起きなさ～い」
「ん・・・」
母さんが台所から呼んでいる。
「ん～、今日は日曜だから、１０時まで寝かせてよ～」
そういいながらベッドから降りると・・・
「むぎゅ」
なんかふんだ。
「この圧力、いいですね、はぁはぁ
　もっと強く踏んでください！！」
俺は何も見てない、見てない
そうだ、夢だ。
もっかいベッドに入ってほら、目を開けるとそこには、
「二度寝はいけませんよ。
　それよりほら、僕を踏んでください」
変態が、いた。
「うわ～～～～～！！」
「ちょ、凪！？」
母さんが、びっくりして部屋に入ってきた。
「あ・・・あれ・・」
「えっ！？」
母さんが、俺の指差すほうを見て、納得したのか言った。
「あぁ、白兎さんね。」
「は！？」
母さんが、変態のほうに近づいて、言った。
「この人はね、朝、家の前におちてたのよ」
「はぁっ！？おちてたって・・・
　母さんは人をなんだと思ってるんだよ！！」

「まったくです！！僕は落ちてたんじゃなくて不法侵入する機会をうかがっていただけだとい　うのに！！」
「よけいわるいわっ！！」
俺の懇親のつっこみが炸裂！！
変態に１０００のダメージ！！
「はぁ、もっと僕を強く　強く殴ってください！！」
だが変態はうれしそうだ！！
「うわっ！近寄るな、変態！！」
「あら、だめよ凪、人のことを変態って言ったら」
「いいんですよ、お母さん。
　僕は気にしていない（むしろうれしい）ですから」
「きもおおおおぉおおぉおい！！！」
あまりのきもさに、聞こえないはずの幻聴まで聞こえてしまった
だが、母さんは聞こえていないようで、「仲がいいのね」といって
部屋から出てしまった。
「ちょっ！！こいつと俺を二人っきりにしないでよ！！」
「そんな照れなくてもいいんですよ」
「てれてねぇ！！」

「で、実際手めぇはどうして俺ん家にきたんだ？」
俺は白兎（名前）を縛り上げてから聞いた。
白兎は、見た目は白い肌、白い髪、赤い目のすっげー美形だ。
だが、
「そんな、理由なんて・・・
　もっと僕を強く縛ってくれたら言いますよ。」
超ドＭなやつのようで、はぁはぁ言っててかなりきもい。
「あぁー母さん？電話かしてー、警察に言うから」
「ちょ・・・ちょっと！！」
「言う気になったか？」

白兎は少し黙ってから、顔を上げていった。
「今から言うことは、信じられないようなことです
それでも、静かに聞いてください」
白兎は、急に真剣な顔をしていった。
「僕は、この世界の住人ではありなせん」
「はぁっ！？」
「ぼくは、この世界で言う魔界のような所からきました」
「何言って「いいから黙って聞いてください」
白兎はさっきの白兎とは別人のような雰囲気で続ける。
「僕の世界では、上と下のランク付けが厳しく、それも生まれながらに決まっています。
しかし、そのランク付けを一気に覆せるようなイベントが何年かに一度あります。
そのイベントの名前が＜バラのお茶会＞と言います」
「お茶会？」
声が、よみがえる。
『お茶会に行ってくるんだ』
十年前、そういって消えた父さん。
俺がそう思っている間にも、白兎の説明は続く。
「お茶会のルールは簡単です。
7人一組のチームで、ゲームをするんです
ゲームの内容はいろいろあります。
鬼ごっこだったり、かくれんぼだったり、しかし、一つだけこの世界のゲームと違うことが　あります」
「なんだ？」
「それは・・・・
命がけのゲームだと言うことです」

「命がけのゲーム？」
「はい、ただ、殺しあえというわけではありません
殺さなくても勝てばいいだけです
ただ、殺してもいいと言うことです」
「ゲーム・・・」
こいつの言っていることは、まるで嘘のようだ。
しかし、父さんははっきりとお茶会に行くと言った。
ほんとうだとしたら、父さんは見つかるかもしれない。
「なぁ、何でそれを俺に言うんだ？」
「このゲームに参加するためには、７人のチームが必要だと言いましたよね？」
「あぁ」
「このゲームのルールで、７人のチームのうちのキング・・・・
つまりリーダーはあなた達が住んでいる世界の人間で、僕らの世界に関連がある者ではなけ　ればいけないというルールがありまして、それで僕はあなたにしたんです」
「はぁ！？
俺はおまえの世界なんてしらねーぞ！？」
「お父さんですよ」
「はぁ？」
「あなたのお父さん、一回前のお茶会に参加したらしいじゃないですか
それでですよ」
「はぁ！？」
ということは・・・・
本当に父さんはこのお茶会に参加したのか！？
「どうです？
参加しますか？」
「・・・・・」
こいつの言っていることは嘘かもしれない。

本当でも死ぬかもしれない。
でも・・・・
「やってやるよ！！
父さんだけこんなおもしろいことに首つっこんでるなんてずりーからな」
「ありがとうございますっ！！
なら、早速・・・・」
白兎が何か唱え始めたかと思うと・・・・
「へっ？」
俺の足下に大きな穴が空いて、
「うわあああぁぁぁぁあああぁぁあ！！」
落ちていった。

## ＢＯＯＫ（前書き）

あらすじ・・・

変体ドＭ兎に連れられて穴に落ちた凪！！

どうなる凪！？

何をする！？白兎！？

**BOOK**

「起きてくだサーイ　なぎくーん」
誰かが呼んでいる。
「いいジャン母さん　今日は日曜だぜ」
起きたくない俺は布団をかぶろうとした・・・・が、
「？」
布団がない。
不思議に思って目を開けると、そこには・・・・
「ん～～～Ｖｖ」
「うわっ！！」
超美形な顔が、本当に目と鼻の先まで近づいていた。
反射的に殴る。
「ぐはっ！！」
男は吹っ飛んでいった。

「痛いじゃないですか～」
「悪かったって言ってるだろ」
俺の前で俺に殴られた場所を痛そうにこすっている美形は白兎という超変態だ。
そして俺はその白兎に巻き込まれた凪（男）だ。
そんで俺たちは今、バラのお茶会にエントリーするためにこいつのいう自分たちの世界、俺から見て別世界に来ている。
「で、ここはどこだ？」
俺たちがいるのは、どこかの建物の中らしい広間のようなところにいた。
目が覚めたらここにいたのだ。
今、俺は見た目はいつも道理だが、内心はすごくあせっている。
だって、広場はすごく豪華で（マジでお城みたいで）しかもなかに

は俺たちのほかにも人がいっぱいいて・・・・・・
もう意味ふー！！ってカンジデス！！
「ここは、あなた方の言う城のようなところです」
「やっぱ城かよ！！
っていうかここでなにするんだよ！！
バラのお茶会へのエントリーは終わったんだろ？」
そうだ。お茶会へのエントリーはこいつが俺が眠っている間に終わらせていた。
だからもう帰れると思っていたのだが・・・・
「ここでは開会式のようなことが行われるんです。」
「開会式～？」
「はい。開会式d「は～い、こっちに注目～！！」
白兎の言葉をさえぎっていきなり誰かが声をかけた。
声のしたほうを見ると、いつのまにかステージの上にかわいらしい少女がいた。
「白兎！！あれだれだ！？
・・・・・・って白兎！？」
「・・・・・・」
白兎は地面に座り込んですねていた。
「おい！！大丈夫か！？」
「いいんですよ。どうせ僕なんて・・・」
こいつドMじゃなかったのか！？
俺らがこうやって言い合っているうちに、少女は話し始めた。
「みなさ～ん！！今回はバラのお茶会に参加していただき、真にありがとうございま～すV
たぶんみなさん連れの方にルールを聞いたと思いますが、ここで一応説明しておきま～　す！！」
ルールか・・・・もう隣ですねている白兎は無視して、聞くことにする。
「まず最初に私たちのいる世界の名称をお知らせしま～す。名前を

ＢＯＯＫといいま～す。」
「ＢＯＯＫか・・・」
「ちなみにこれは、今年決まりました～Ｖ」
「今年かよ！！」
突っ込んだら周りの人ににらまれた。
・・・・黙っていることにしよう。
「でも～名前はころころと変わりますんで～おぼえなくてもいいですよＶｖ」
突っ込みたい・・・
でも突っ込んじゃいけない・・・
「ころころ変わるなら言わなくてもいいんじゃないですか？」
いつの間にか回復していた白兎が行った。
また周りの人ににらまれる。
「あっ、すいませーん
こいつＫＹなんで～」
とりあえず首絞めておいた。
「まぁ、前置きはここまでにして～本題に入りま～す」
前置きが長いような気もするが・・・
「前置きが長いですねぇ」
「だからお前は突っ込むな！！」
もう周りの人はにらまなかった。
とりあえず今度は首を絞めて気絶させて置いた。
少しからだが痙攣しているが、気にすることもないだろう。
「はい、ではルールを説明します。
ルールは簡単。７人１チームでこちらがきめたルールのゲームに勝利すれば勝ち。
ゲームはルールに反していなければ、何をしてもＯＫです。
ですが、いくつか、破ってはいけないルールがあります。
１、絶対にそのチームのリーダーはこの世界の人間であってはいけない。

2、チームにやる気のないものを入れてはいけない。
3、ゲームのルールにそむいてはいけない。
この3つです。」
「ルール・・・か」
何でもかんでもルールにとらわれたゲームだと思った。
「そうでしょう」
隣を見ると、白兎がウインクをしてきた。
なんだ!?こいつは読心術が使えるのか!?
「まぁ、とりあえず、このルールを破かなければ何も言いません。
ですが、」
会場にいるみんながつばを飲む。少女の顔にはそれだけの迫力があった。
「ルールを破いた場合、即失格となるので、注意してください。」
それでは、開会式を終わります。
そのひとことで、みんな動き始めた。
「はぁ～、俺、ルールって嫌いなんだよなぁ
よく言うじゃん、ルールは破くためにあるって」
「ですよｎ「ハ～イ、待って見なさ～ん!!」
白兎、またも途中でさえぎられて大ダメージ!!
今度は床に倒れている!!
なんとなく血を吐いているようにも見える・・・
なぜだ!!
「ここでバッドニュースで～す!!
参加人数が多すぎるため、参加するための条件をつけ間～す!!
それは・・・・・」
『それは・・・・』
「それは、
3日後までに後5人の仲間を見つけてきてくださ～いＶｖ」

こうして、俺の「あと3日だぞ☆仲間探しＶｖが始まった・・・・

## 仲間探し　1日目（前書き）

とりあえずがんばろう

## 仲間探し　1日目

その後、とりあえず俺たちは俺たちの世界に帰ってきた。
朝ごはんも食べて元気百倍ア○パ○マ○だ

「ていうかどーすんだ？
三日で仲間探しだぜ？
無理じゃね？」
「ほんとにどうしますかねぇ、これは予想外でした。」
白兎め、もうちょっとよく考えろ
「考えてましたよ？」
「だから人の考えを読むな」
はぁ、ほんとにどーすんだか。

「適当なやつにこえかけて、仲間にするのはどうだ？」
「だめでしょうね。たぶん失格ですよ。」
「だよなぁ。」
となると、人を脅す作戦は無しか
「意外とこわいんですね」
「友達にでもこえかけてみるか～」
「ついに無視ですか・・・」
その割に白兎はうれしそうだ
「まぁ、一人のりそうなのはいるけどな・・・」

「おっ、凪ジャン！！どーしたの？」
こいつは俺の友達の空だ。
ばかだけどいいやつ＋人生楽しいこと優先のやつだ。
多分こいつなら乗ってくれるだろう
「う～ん、結構いい顔してるんですけど、僕としてはもう少し童顔

のほうが・・・」
「てめぇの価値観は聞いてねぇ」
「なぎ、そいつだれ？
　変態？」
いいところついてる。
「僕はですｎ「まぁとりあえず聞いてくれよ」
やっぱり白兎はうれしそうだ。

「ふぅん、そんなことがねぇ」
「信じるのか！？」
「あたりまえじゃねぇか！！俺は凪の言うことは信じるぜ！！」
「ありがとよー！！」
さすが俺の親友！！
感動の抱擁をしあう
後ろで白兎がうらやましそうに見ていたが総無視

そのあと空の家で遊んでいたら遅くなっていた。

「て言うかぜんぜん見つけてねー！！」
「まぁいいじゃないですか。」
「次からは俺も手伝うしよ」

仲間が増えた！！　ちゃっちゃらちゃ～

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2728f/

---

バラのお茶会

2010年10月28日07時32分発行